

令和7年6月15日

令和6年度白糠町教育委員会の活動状況に関する点検評価報告に伴う評価コメント

北海道教育大学釧路校副学長 玉井康之

白糠町は、教育行政執行方針にも示されているように、国の「第4期教育振興基本計画」に沿いながらも、さらに地方独自の教育活動や地域振興を担う人材育成を強化している。

具体的には、第1に、白糠町は、これまでも強化してきた「ふるさと教育」を中心に、探究学習活動を強化しながら、地域の誇りと地域に貢献する活動を重視していることである。地域探究活動は、単に地域を深く知るだけでなく、地域に貢献する社会活動を通じて、知識と行動が一致した非認知能力や人間性を高めるものである。この点を重視して、白糠町では、地域づくり活動等を探り入れながら、「ふるさと教育」を推進している。

第2に、白糠町は、北海道内でも最も早い段階で手がけてきた小中学校の義務教育学校化を推進していることである。義務教育学校化は、学力や人間性を9年間かけてトータルに育成するためのもので、白糠町の先駆的取り組みは、多くの市町村自治体や附属義務教育学校に影響を与えている。ちなみにこの白糠町の取り組みは、海外にも知れ渡っており、令和7年7月8日には、21名の台湾国立大学研究者らが白糠町の庶路学園を訪問する予定である。

第3に、白糠町では、国際的な視野を持ちつつ、地域の良さを認識するため、外国語を活用した学校間交流や外国人との交流を積極的に進め、グローバルな視点でローカル性の良さを捉える試みを推進している。語学力は、長い期間の慣れが不可欠であるが、白糠町では、幼小期からの外国語交流を通じて日常的な生活の中での実践的な外国語の習得を図っている。

第4に、白糠町では、白糠町内の全員の「子ども会議」を積極的に推進するなど、子ども間のコミュニケーションや主体性を重視している。これにより、少子化の中でも幅広い交流で多様な観点と社会性を身につける経験知を高めている。またこれらはいじめ問題等への自己規律や子ども自身の自律性・生きる力を育成するもので、長期的に社会で活躍できる素養となるものである。

第5に、白糠町では、学校と保護者・地域が連携し地域全体で学校を支える運営を推進していることである。近年は、多くの市街地で親子レクレーション・行事も縮小し、保護者会も解散したりする学校が増えている中で、子どものトータルな発達環境を支援する上で、学校と保護者・地域住民が連携し、学校を支えていくことは不可欠である。白糠町で

は、そのためにコミュニティスクールの運営も強化し、保護者・地域住民への学校支援の啓発も推進している。

第6に、白糠町は、家庭教育支援も充実させており、親子を含めて、幼小期からのブックスタート事業による読み聞かせや読書活動を推進している。絵本を小学1年生にも配付することは、小学校期以降の基礎学力を確保していくことにも繋がる。また入学支援金や給食費無料化の取り組みは先進的な独自政策として国の政策にも影響を与えつつある。

第7に、白糠町は、社会教育においても、まちづくり活動・ボランティア活動を積極的に推進している。まちづくり活動・ボランティア活動は、社会に貢献する活動の実感を通じて社会貢献度感の感性を育成するもので、これらが青少年健全育成活動にも大きな影響を与えるものであることは言うまでもない。

以上の様に、白糠町は、歴史的にも大変先駆的な活動を多く推進してきており、多くの影響力を与えてきた。令和6年度の教育行政施策もその延長にあり、教育行政のあり方として大変評価できると言える。